

群馬県大学図書館協議会
群馬県図書館協会

平成21年度 第1回

大学図書館研究会 群馬県図書館協会専門研修

開催日：平成21年8月25日（火）
会場：新島学園短期大学

参考資料

1. 実施要項
2. 参加者名簿
3. 事例報告レジュメ
4. 「会報」第22号
5. 平成21年度第1回大学図書館研究会
アンケート用紙

平成21年度 第1回

大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修実施要項

群馬県大学図書館協議会
群馬県図書館協会

日 時： 平成21年8月25日(火) 13:30～16:30

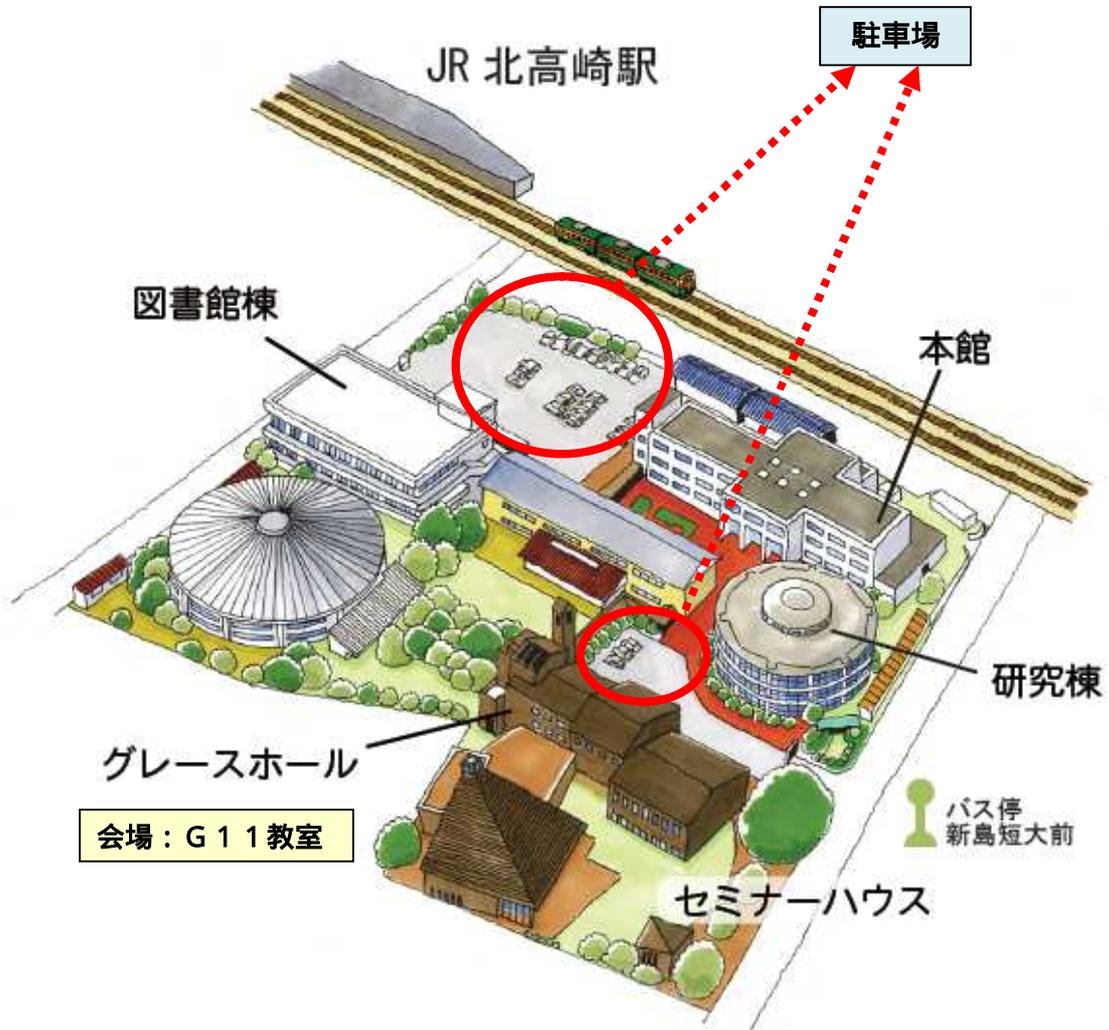
会 場： 新島学園短期大学 グレースホールG11教室

〒370-0068 高崎市昭和町 53 Tel. 027-326-1155

テ ー マ： 「図書館資料の分類を考える」

日 程 等	
受 付：	13:00～13:30 (30分)
1. 挨拶：	13:30～13:40
主催者	群馬大学総合情報メディアセンター長 遠藤 啓吾 (群馬県大学図書館協議会会長)
会場館	新島学園短期大学学長 大平 良治
2. 研 修：	【13:40～16:30】
(1) 講演	13:40～15:40
	「図書館における分類の現状」 文教大学越谷図書館司書 藤倉 恵一 氏 (120分)
【概要】	
	図書館における整理業務のあり方は、業務の機械化や職員体制の変化などによってかつてと大きく異なりつつある。図書館において分類がいまどのように扱われ、またどのように考えられているか、現場の視点、分類研究者の視点、分類提供者の視点それぞれを交えお話ししたい。
(2) 休憩	15:40～16:00 (20分)
(3) 自由討議	16:00～16:30 (30分)
	講師を交えた意見交換
3. 閉 会：	16:30 (希望者は図書館見学)

キャンパス案内図





藤倉 恵一（文教大学越谷図書館）

1. 図書館の現場における分類の現状

「図書の分類に関する調査」（2008.4）

- ▶ 平成19年度の図書館調査の付帯調査として実施
- ▶ 分類作業は誰が行っているか
- ▶ どういうものを参考にしているか
- ▶ 使っている分類表の版
- ▶ 桁数や図書記号、別置記号など
- ▶ 件名標目の付与

など

整理業務に関する悉皆的調査は
1997年以来11年ぶり

誰が分類作業を行っているのか？

▶ 大学図書館の場合

	大学	公共
自館の職員	1,189 89.1%	1,803 71.5%
民間MARC作成機関	12 0.9%	1,657 65.7%
外部の整理受託業者	105 7.9%	153 6.1%
その他	11 0.8%	53 2.1%
	1,335	2,523

表中のパーセンテージは回答館数に占める割合
(この項目は複数回答)

▶ 公共図書館の場合

まだ多くの図書館では自館で分類作業を行っている(臨時・委託・派遣含む)

分類付与にあたって他館を参考にしているか

▶ 大学図書館 している...96.2%

- NDL-OPAC 25.4%
- NACSIS-CATまたはWebcat 96.5%

▶ 公共図書館 している...79.1%

- NDL-OPAC 49.5%
- 民間MARC 48.6%
- 都道府県立図書館 26.2%
- NACSIS-CATまたはWebcat 15.8%

多くの図書館で他館の分類を参考にしている

※この調査結果は全国図書館大会および後日の発表に向けた集計での暫定的な値であり、現在精査中です。公式発表されるものと若干異なる場合があることをあらかじめご了承ください。

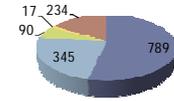


図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

新規受入の図書（和図書）に使用する分類は？

▶ 大学図書館の場合

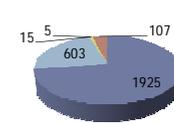


- NDC9版
- NDC8版
- NDC7版
- NDC6版
- その他

NDC使用率 84.2%

- ・9版は圧倒的シェアとはいえない
- ・まだ7版の使用館が5%を超える (洋書の場合も5.1%)
- ・根強く6版ユーザーがいる
- ・NDC以外では専門分類表 (特に医学系) がかなりのシェアをもつ

▶ 公共図書館の場合



- NDC9版
- NDC8版
- NDC7版
- NDC6版
- その他

NDC使用率 96.0%

- ・9版が72.5%の普及率
- ・残りの大部分も8版ユーザー
- ・都道府県立はNDCを使用していないケースもある (9館)

これらの結果から見えるもの

- ▶ 業務の中に、分類は**まだ**確かに位置づけられている
 - ▶ しかし、外部委託の割合が高くなっている
 - 館内の委託職員が作業を行っている数を含めると...?
 - ▶ 公共図書館では半分が図書館外に出まわっている
- ▶ 分類表を見て図書館員が分類を判断するよりも、「他館の例を参考に」しているケースが大多数
- ▶ NDCの利用率が増大している
 - ▶ 出版情報、民間MARC、NDL、他機関のものを流用しやすい

分類作業が「**簡単な作業**」になってきている...?
専任職員ではなく臨時職員や外部委託できる仕事

2. 分類用語の基礎知識

分類に必要な三要素

- ▶ 対象を分類するための「**区分原理**」(原則・基準)
- ▶ 区分される対象である「**被区分体**」(類概念)
- ▶ 区分されたものである「**区分肢**」(種概念)
- ▶ オレンジジュース とは
 - ▶ 「ジュース」という飲み物(被区分体)を
 - ▶ 「オレンジ」という素材・味(区分原理)で
 - ▶ 分類したもの(区分肢)のひとつである
 - ほかの区分肢として「アップルジュース」「グレープジュース」など
 - この区分原理では、炭酸入りかどうか、ペットボトルか缶か、内容量、メーカー、販売地域などは区分されない



図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

分類法を分類する：機能による分類

- ▶ 書架分類法 (shelf classification)
 - ▶ 書架に資料を体系的に並べることが目的とした分類法
 - ▶ 配架位置は相対的に変化する(棚に余裕が必要)
 - ▶ 記号の長さに量的限界がある
 - ▶ 1つの図書に対して1つの分類しか付与できない
(ほとんどの図書館が採用している)
- ▶ 書誌分類法 (bibliographic classification)
 - ▶ 資料・情報を検索するために主題を適切に記号化する分類法
 - ▶ 記号に量的制約がない
 - ▶ 分類は複数付与することができる

分類法を分類する：構造による分類

- ▶ 列挙型分類法 (enumerative classification)
 - ▶ あらかじめ各項目が表に列挙されている分類法
 - ▶ 表に列挙されたものの中から必要な分類記号を選択する
 - ▶ 表に列挙されていない主題を分類するのが困難
- ▶ 分析合成型分類法 (analytico-synthetic classification)
 - ▶ 分類対象の概念を分析し、その要素・概念(ファセット)ごとの記号を決められた手段で合成して主題を表現する分類法
 - ▶ 概念が正しく分析されていれば複雑な主題でも記号化することができる
 - ▶ 習熟に時間がかかる

分類法を分類する：使用者による分類

- ▶ 一般分類法 (general classification)
 - ▶ 知識の全分野を対象にした分類法
 - ▶ 一般的な図書館が使用する
- ▶ 専門分類法 (special classification)
 - ▶ 特定の分野を対象にした分類法
(領域が特化されているため詳細であることが多い)
 - ▶ 専門図書館や蔵書群に対して使用する



図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

分類法を分類する：記号法による分類

- ▶ 純粹記号法 (pure notation)
 - ▶ 1種類の記号しか用いない分類法
 - ▶ 区分肢の数に限りがある
- ▶ 混合記号法 (mixed notation)
 - ▶ 複数種類の記号を用いる分類法
 - ▶ 文字種・文字数が多いので区分肢に余裕がある
- ▶ 十進記号法 (decimal notation)
 - ▶ 十進数字を使った分類法 (覚えやすい・並べやすい)
 - ▶ 階層構造が表現しやすい (構造がわかりやすい)
 - ▶ 区分肢の数は9 + その他 (0) であり、これを超える区分の追加が難しい
- ▶ 非十進記号法
 - ▶ 数字に限定されず記号を用いる分類法
 - ▶ 階層構造の把握は容易でない
 - ▶ 詳細な主題表現が可能

十進記号法の「読み方」

- ▶ **Decimal Classification / Decimal Notation**
 研究社 リーダーズ英和辞典第2版より
 dec-i-mal /dɛs(ə)məl/
 —a [数] **十進法の** (cf. CENTESIMAL); **小数の**; 通貨など 1/1
 0 [1/100] 単位に分けられた, 十進制の; 通貨十進制の.

Vanda Broughton “Essential Classification” (2004) より
 decimal notation (十進記号法)
 分類記号が十進法に細分しているかのように、言い換えると、
実在のまたは想像上の小数点に続く、
 21,212,223,26,35,354,37 という順序のように、整理保管してい
 る数字表記法。

十進記号法の「読み方」

- ▶ 913.6 (日本文学—小説—近代)
 - ▶ 数字だと きゅうひやくじゅうさん てん ろく ×
 - ▶ 分類法では **きゅういちさん てん ろく**
 .9136 というような考え方による
実在のまたは想像上の小数点 (a real or imagined decimal point)

3桁という数字はあくまで**順序を示すもの**にすぎない
 文学は900 日本文学は910 だが
 実際は9 91 である
 3桁に調整しないと(大小を表すただの数字だと)
 9 (文学)、11 (日本思想)、...89 (その他の言語)、91 (日本文学)
 899 (国際語)、901 (文学理論)



図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

3. 日本十進分類法の概要 -- 十進分類法の成立と現在

日本十進分類法（NDC）の特徴

- ▶ 一般分類法である
 - ▶ 一般的な公共図書館において十分である
- ▶ 典型的な**列挙型分類法**である
 - ▶ 複雑な記号法を持たず、分類作業もそれほど難しくはない
- ▶ アラビア数字による**十進記号法**を用いる
 - ▶ 排列順序を容易に指示できる(順序記号法)
 - ▶ 数字だけの**純粹記号法**だから記号を理解しやすい
 - ▶ 階層構造がある程度明らかである
 - ▶ **区分肢が9つしかない**ため、区分に限界がある
(階層構造が理論的に破綻している箇所が見られる)

十進分類法の歴史背景（DDCの歴史）

- ▶ 1870年 Melvil Dewey(1851-1931)がアマースト大学補助員時代に作成した分類体系をもとに“**Decimal Classification**”を発表
 - ▶ Harrisの分類体系を参考にした主題排列
 - ▶ 画期的な記号法、相関索引
- ▶ Deweyの存命中に12版(1927年)まで改訂を重ねる
- ▶ 1951年 15版改訂時に31,000項目を4,600項目に大幅削減
- ▶ 16版以降 **Phoenix**(フェニックス:分野ごとの大幅改訂)導入
- ▶ 現在 第22版(2003年)
版を重ねるごとに大規模改訂がある

16版以降、DDCは書誌分類法を志向していく
(配架のための分類ではなく、主題を排列するための分類へ)

DDC13版（1932年）より

- ▶ 現在のDDCと比べて簡素な表

それでも

373.243-.249 科目別中等学校
373.24355 軍中等学校
(374.24+355 Military Science)
373.245 科学・技術
(373.24 + 500 Scientific)
373.4-.9は「地理区分」

記号合成により柔軟な主題表現

DECIMAL CLASSIFICATION	
373.2	Types of secondary schools <small>Individual schools may be class. with their respective types, dividing after so the figures as in 373.243 or 373.249</small>
.22	Day schools Boarding schools
.223	Day schools
.223	Boarding schools
.23	As to organization
.232	4-year highschools
.234	6- " "
.236	Junior " "
.238	Senior " "
.24	As to curriculum
.241	Academic
.242	Classical
	<small>Latin and highschools</small>
.243-.249	Other types by subject <small>May be divided like 373.243, e.g.</small>
	<small>373.24321 Military; see also 371.43</small>
	<small>243 Scientific, or scientific and technical combined</small>
	<small>245 Industrial, vocational; see also 211.41</small>
	<small>2 Commercial</small>
4-9	Special countries and schools: history, reports, catalogs etc.
374	Adult education <small>Divided like 373.243, e.g. 374.241 Higher English schools, Bion, Harrow etc</small>
	<small>Home education. Self education and culture. Cultural, personal aspect of education.</small>
	<small>Subdivided by a with form, numbers if whole; e.g. 374.45 magazines pertaining to this work; 374.68 Conferences, conferences, exhibitions, general meetings.</small>
	<small>The term Adult education covers the broad field of self education thru private reading, study clubs and reading circles, seminars, lectures, evening and correspondence schools, lecture courses and other forms of extension.</small>



図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

DDC22版(2003年)より

▶ かつてに比べ詳細な表

373	Education	373
.482	Women in secondary education Do not use for secondary education of young women; class in 373.182352	
.59	Historical, geographic, persons treatment [.093-.099] Treatment by specific continents, countries, localities Do not use; class in 373.3-373.9	
.1	Organization and activities in secondary education For comprehensive work on secondary education for specific objectives, see 373.012; for comprehensive work on schools and programs of specific kinds, levels, curricula, focus, see 373.2	
[.101-.109]	Standard subdivisions Do not use; class in 373.01-373.09	
.11-18	School organization and activities in secondary education Add to base number 373.1 the numbers following 371 in 371.1-371.8, e.g., professional qualifications of teachers 371.12; secondary education of young women 371.182352; however, for cooperative education, see 373.28	
.19	Curricula Class curricula directed toward specific secondary educational objectives in 373.011; class education in secondary schools identified by specific types of curricula in 373.24-373.28	
.2	Secondary schools and programs of specific kinds, levels, curricula.	

▶ 細かな主題への対応
▶ 合成や参照の細かい指示
Do not use for...; class in xxx
...についてはこの番号を使用せず、xxxに分類しなさい

▶ ファセット分析手法の導入による主題表現力向上
(フェニックス実施箇所)

DDC主題表現力の進化

▶ 21版 生命科学(Life Science)の改訂(ファセット化)により

例: マウスの組織病理学 = 571.935¹9353

571.93 病気一般
+5 571.5 組織生物学
+1 571.5-.9に与えられたファセット指示子(Facet Indicator) '571.1 動物'から
+9353 マウス '599.353 マウス'から

▶ 論文単位でも分類記号の付与ができるようになる
(20版 音楽、21版 生命科学、22版 数学...)



日本における近代図書分類法の歴史

- ▶ 1876年 東京書籍館書目
 - ▶ 東京書籍館(日本初の公共図書館)における分類
 - ▶ 6部門の分類
 - ▶ ブリュネやハリスの分類、四部分類の影響
- ▶ 1887~1888年 八門分類表
 - ▶ 東京図書館の分類(のちに「帝國図書館八門式分類表」となる)
 - ▶ 戦前まで使用される
- ▶ 1909年 十門分類法(山口縣立図書館圖書分類表)
 - ▶ 山口県立図書館長佐野友三郎が八部門分類をもとに拡張
 - ▶ DDCの例に倣って100区分とする(構成は別物)
- ▶ 1920年代 大阪府立図書館分類表
 - ▶ 数字を使った非十進分類法を試用(1924年時点)





図書館における分類の現状

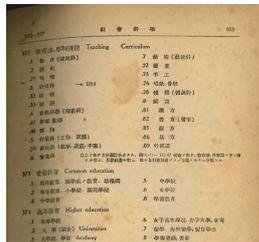
平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

NDCの歴史

- ▶ 1928年 もり・きよし(森清 1906-1990)が「園研究」第1号に「和洋図書共用十進分類法案」として発表
 - ▶ CutterのExpansive Classificationをもとに主クラスを配置
- ▶ 1929年 「日本十進分類法」と改題
- ▶ 1942年までに5版まで改訂を重ねる
 - ▶ 縮刷版は第8版(1949年)まで刊行される

NDC5版(1942年)より

- ▶ 現代よりはもちろん簡素だが当時としては充実した表
 - ▶ DDCのように記号合成による詳細な主題表現手法も
- 372 教授法, 學科過程 Teaching Curriculum
 ~ 以上ノ如ク主分類区分オスル, 例エバ: - 372.47 植物ノ如ク



5版の縮刷版である第8版(1949.3 實業文藝圖書館発行)より

NDCの歴史

- ▶ 戦後 GHQダウンス勧告「NDCを標準分類法に」
 - ▶ 1950年 新訂6版(1951年 新訂6-A版)
 - ▶ 1961年 新訂7版
 - ▶ 1978年 新訂8版
- ▶ 1986年 もり・きよし引退(1990年没)
 - ▶ 新訂9版の改訂作業開始
 - ▶ 1995年 新訂9版刊行
 - ▶ 関連索引の充実、MRDF(データ形式)の頒布
 - ▶ 全国書誌を意識した改訂
 - ▶ 書誌分類法をめざした改訂



図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

NDC9版（1995年）より

- ▶ 現代の出版状況と過去の継続性を重視した項目
- ▶ 参照(を見よ参照、をも見よ参照)の充実
- ▶ 分類小項目(：の後に続くもの)や関連分類項目(注記に記載されるもの)が増加
- ▶ 改訂箇所が見やすく

教 育		370
374.1	学級科目・編成、指導要録、成績管理	
	★学級文庫--017.2	
12	中 学 校	
13	中 学 校	
14	高等学校	
2	学級誌・学生科学、大学明細	
3	教 員 誌 -- : 375.7	
35	教職、教職資格、教職研修、教職教育、教職【国専業】の月と日、報告	
37	教育行政、教育統計	
4	学校行事・学校儀式	
45	学校講話【教育講話】	
46	筆記、修学旅行 -- : 796.4	
47	学生会、学校祭	
48	進 路 志	
5	学校事務、学校会計	
6	家庭と学校との関係・PTA、学校文庫会、保護会、同窓会	
	★家庭と学校との関係--371.33	
7	学校施設・設備 -- : 526.37	
	校舎、校舎、運動場、学校園、学校園、学校園、学校園	
79	旅行、教育旅行、学生旅行 -- : 375.19	
8	校外教育・非正規学校、私立学校	
9	私立学校	

4. 日本図書館協会分類委員会の活動 -- NDC改訂に向けた動き

日本図書館協会分類委員会（第32期）

- ▶ 委員長 那須雅照(聖徳大学教授;元国立国会図書館 第32期~)
- ▶ 大学教員 3名
- ▶ 国立国会図書館 2名
- ▶ MARC会社 1名
- ▶ 公共図書館 1名
- ▶ 大学図書館 1名
- ▶ 個人 1名 9名 + 事務局1名
- ▶ 毎月第2火曜日 15:00 ~ 18:00に
定例会議を開催(年12回)
- ▶ 記録はホームページで公表
<http://www.jla.or.jp/bunrui/>



NDC新訂10版の改訂作業進捗

- ▶ 2002年3月 活動開始(9版の見直し)
- ▶ 2003年12月 9版正誤表発表
- ▶ 2004年4月 金中委員長(当時)による改訂方針発表
- ▶ 2005年 1、3、4類審議
- ▶ 2006年 3、1、8、2類審議
- ▶ 2007年 2、3類審議
- ▶ 2007年 3、7類審議
- ▶ 2008年 7、0類審議
- ▶ 2009年 10月 3類試案概要公表
- ▶ 2009年 12月 2類試案概要公表
- ▶ 2009年 2月 0、5類(部分)審議;1類再審
- ▶ 2009年 7月 7類試案概要公表
- ▶ 2009年 7月 0類(部分)試案概要公表

これ以外にも、各類で改訂案をまとめた内容を再度審議することもある



図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

NDC10版改訂の基本方針

- ▶ **9版の改訂方針を踏襲**
NDCの根幹に関わる体系の変更はしない
書誌分類表をめざす
- ▶ **新主題の追加を行う**
BSH、NDLSH、新刊書の書名の用語などを参考に項目名追加
- ▶ **全般にわたって必要な修正・追加などを行う**
論理的不整合はできるだけ修正する
用語の整備
他のツールの情報の取り込み
分類作業が行いやすく、また利用者にも分かりやすい分類表をめざす
細目表と関連索引の用語、分類記号の整合性を図る
- ▶ **NDC・MRDF9の本表と関連索引を統合し、分類典拠ファイルを作成**

金中和利和「日本十進分類法新訂第10版の作成について」：JLA分類委員会の改訂方針、
図書館雑誌 98(4)、p.218-219、2004.4より整理抜粋



改訂作業の進捗について

- ▶ 「図書館雑誌」にて3、2、7、0類の試案の概要を公表
ただし0類については007を除く部分
- ▶ 分類委員会ホームページ上で詳細版をPDFで公表
「雑誌」にはページ数の制約があるのでPDFで補足公開
必要に応じて改訂を行うことがありえる
- ▶ 試案説明会(中間報告)の開催予定
2009年11月10日(火) 13:00～16:30
日本図書館協会会館



改訂の大きなポイント

- ▶ **007.6 と 547/548 の統合検討**
 - ▶ 9版時代から急速に発展し、出版点数も多い分野
 - ▶ どこに、どのように統合するのが最適かはまだ検討中
008を拡張する案と547/548を整理する案
- ▶ **関連索引の充実**
 - ▶ 9版で別冊になった関連索引21,594語をさらに拡充する
 - ▶ 本表中の語で索引語になかったものも積極的に索引へ
 - ▶ NDLSHやBSH第4版の語をも積極的に収集

索引語データベース化計画(随時拡充の可能性を模索)





図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

分類委員会に関する問題点（私見）

- ▶ 改訂作業の遅延
 - ▶ 拙速よりははるかにマシではある
 - ▶ 時間的制約がきつい(月1回・3時間では審議が進まない)
 - ▶ 表の改訂以外にも審議事項が少ない
- ▶ 委員が流動的
 - ▶ 平均して年に1人程度の委員交代がある
 - ▶ 特に過去の審議結果が効率的に継承されていない
 - ▶ 改訂中の委員長交代は過去例がない(日図協の規程上仕方ないが)
- ▶ 分類法・表に対して保守的
 - ▶ 改訂方針「なるべく図書館に影響を与えないように」
 - ▶ 空き番号が有効活用されない
- ▶ 改訂試案に対する図書館界の注目の度合いが少ない
 - ▶ 試案の概要が意外に読まれていない

5. 私大図協・分類研究分科会の活動 -- NDCを批評・検討する

分類研究分科会の概要

- ▶ 私立大学図書館協会東地区部会研究部分類研究分科会
 - ▶ 私大図協・東地区部会加盟図書館に所属する図書館員で構成
 - ▶ 2年1期、加盟館内の公募により会員組織

【歴史】

- ▶ 1954年 私立大学図書館協会関東部会研究会成立
- ▶ 1955年10月、研究部常任幹事校、「研究分科会」の設置を承認
- ▶ 17の分科会が設置希望される
- ▶ 1955年12月7日 分類研究分科会設立(世話人:立教大学・道村晃氏)

【現在】

- ▶ 2004年4月より藤倉が代表者を務める
- ▶ 2009年8月現在、会員 7大学7名(個人会員1名含む)

分類研究分科会の活動

- ▶ 基本テーマ
 - ▶ いわゆる図書館分類法だけでなく件名、シソーラス、Indexing理論等を含んだ“トータル”な意味での図書館分類法とその理論に関する研究
- ▶ 近年20年ほどの課題
 - ▶ H.E.BlissやJ.Millsらの論考が中心(分析合成型分類の理論など)
 - ▶ 分類法の性能比較・検証
- ▶ 過去4期(8年)のテーマ
 - ▶ 2002-2003年度 BC2とNDC9版の性能比較(教育分野)
 - ▶ 2004-2005年度 DDC20、21、22版+13版とNDCの性能比較
 - ▶ 2006-2007年度 NDC9版の性能向上試験
 - ▶ 2008-2009年度 「分類の基礎」の再発見(図書館分類法に限らない) NDC10版試案の検証



図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

分類研究分科会の基本姿勢

図書館学は実学である、とはよくいわれるが...

- ▶ **実学と単なる実務との違いがよく理解されていないのではないか**
図書館学は実務処理のための小手先のテクニックを論じる傾向にあった
- ▶ **実務を優先し理論を軽視する姿勢が、実は実務がうまくいかない元凶ではないか?**
基礎を固めない実務は、問題に対してアドホックに対処せざるをえず、すぐに行き詰まる
J.Mills著、吉田暁史・田窪直規ほか著「資料分類法の基礎理論」序論より

知識の組織化は図書館の基礎である



他団体との交流・連携

- ▶ TP&Dフォーラム(整理技術・情報管理等研究集会)の共催
 - ▶ 1991年、日本図書館研究会整理技術研究グループが主催
 - ▶ 教員・図書館員・業者・研究者など立場を超えて徹底した討議を行う
 - ▶ 第2回から分類研究分科会が運営協力、以後共催団体になる
(現在の主催者は「TP&Dフォーラム実行委員会」)
- ▶ 日本図書館研究会情報組織化研究グループ(旧・整研)との交流
 - ▶ TP&Dフォーラムなどを通して関西圏の研究者らとの信頼関係醸成
 - ▶ それぞれの50周年記念を相互に表敬訪問(分類2004年、整研2007年)
- ▶ 主題文献精読会
 - ▶ 分類研究分科会関係有志が設立した研究会
 - ▶ 私大図協加盟図書館員に限らず、立場をこえて参加できる
 - ▶ 分科会ではできない文献の集中的な精読



当面の活動計画

- ▶ 2008-2009年度会期
 - ▶ 会期のまとめとなる研究発表会(2009年12月)に向けて
NDC10版試案の検討・批評を作成
JLA分類委員会にも提出する予定
 - ▶ NDC10版試案説明会への出席
- ▶ 2010-2011年度会期(あくまで予定)
 - ▶ NDC10版試案検討・批評の継続(以後公表されるものにつき)
 - ▶ NDC10版刊行に前後した総合的な批評
など





図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

分科会に関する問題点（私見）

- ▶ 分類研究分科会に限った話ではないが、
 - ▶ 会期が2年であり、継続的な研究が行いにくい
 - ▶ 会期中に会員の異動(特に図書館外への転出)があり、研究活動を維持しにくい
 - ▶ これにより休会・廃会に至った分科会が既に複数ある
 - ▶ 私大図協の東地区部会に所属(事実上関東圏)の図書館員のみというクローズな場であり、分野を同じくする教員や研究者との積極的交流が取りがたい(そういう意味で分類研究分科会は型破り)
 - ▶ いまどきの大学図書館員に**研究意欲**はあるか？ (研究≠研修)
- ▶ 専任職員が漸減する中で、継続的研修や研究に対する職場(上司)の理解が得られがたい
- ▶ 研修は即効性で実利のあるものばかりが目立され、整理技術などの「**地味**」なものは敬遠されがち

6. NDCの現在と将来

NDCの将来は明るいのか？

- ▶ NDCの利用率はきわめて高い
 - ▶ 公共図書館96.0% 大学図書館84.2%
 - ▶ 学校図書館 小学校89.7% 中学校92.7% 高校99.3%全国SLA研究調査部「2008年度学校図書館調査報告」
(無作為抽出による)
- ▶ 改訂が遅い
 - ▶ 版が変わるのに10年以上を要する
 - ▶ 改訂審議が始まってから5年経ってもまだ終わらない
- ▶ 図書館界のニーズに応えられていない???

NDCの将来は明るいのか？

- ▶ 区分肢も限界が見えている
 - ▶ 十進分類法最大の欠点ともいえる「区分肢が9つ」
 - ▶ 改訂では下位の番号を使わざるを得ない
小規模図書館や公共図書館では分類がしづらくなる
- ▶ 改訂方針が保守的である
 - ▶ NDCの論理構造に欠陥があることは数十年前から指摘され続けているが、改訂方針で構造の改善はしないと謳う
 - ▶ 大きな分類変更をすることで図書館に大きな影響(再分類作業や配架変更等)を及ぼすことを避けている
- ▶ 「書誌分類法をめざす」ことは果たして可能か？



図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

NDCの将来は明るいのか？

▶ ジレンマの連鎖

- ▶ 館界の利用率が高いから大規模改訂ができない
- ▶ 大規模改訂ができないから分野によって改訂が困難
やむを得ない対応として桁数が増える
- ▶ 桁数が増えるから現場で不評である
6~7桁をラベルに印字したくない
3~4桁では分類できず書架が混沌とする
- ▶ それでも使わざるを得ない
過去からの積み重ね
他館例を参考に作業をするから、自館も合わせなくてはならない
(利用率はさらに高まる)



NDCの将来は明るいのか？

▶ そもそも

- ▶ 図書館界で整理技術はどのように位置づけられているか？
- ▶ 必要で、重要なものだと考えられている
まだ自館の業務の中に位置づけ(特に大学図書館の場合)
- ▶ 他館の分類を参考にするのが当然のようにになっている
コピー・カタログが目録作業を経験ある職員の仕事ではなくしたように、分類作業からも高度な専門性は失われつつある
- ▶ 研修・研究のテーマとしては地味にとられがちである
図書館員は即効性のある研修を求めている(?)
論文が少ない

実は日本に限った話ではない



分類が持つ可能性

- ▶ 現在の分類に関する論文・研究の主流は情報科学領域
自動分類、画像・映像分類、メタデータにも関連
ファセット分類も注目されている
- ▶ フォークソノミー (folksonomy; 自然言語によるタグ付け) の普及
 - ▶ ブログやSNS、Wiki、動画投稿サイトなどで急速に普及
 - ▶ それと意識しない「分類作業」の実践(市民レベルで)
- ▶ 知識の分類は図書館(図書)に限定されなくなっている





図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

NDCの活用可能性（一端）

- ▶ 図書館が所有する蔵書の分類（の拡張）
 - ▶ 分類 = ラベルに印字するもの、という考えは適切でない
 - ▶ 請求記号はあくまで書架排列のための記号にすぎない
 - ▶ OPACでは多面的な検索ができる
 - ▶ 「分類」フィールドを有効活用し、桁数の多い（= 詳細な）分類を付与
 - ▶ 複数主題をもつものは複数の分類を付与することもできる
 - ▶ OPACの提示順を「分類順」にすることができれば...
- ▶ 図書館が発信する情報への付与（メタデータの一部）
 - ▶ 機関リポジトリのメタデータ、検索キー、提示順として
 - ▶ バスファインダーのメタデータ、提示順として

来るべきNDC11版に向けて（私見）

- ▶ 改訂体制の抜本的見直し
 - ▶ 月1回、3時間の審議では迅速な改訂作業は不可能
(メーリングリストのおかげで改善はしているが)
 - ▶ 電子的な検討の拡充(典拠データの有効活用)
 - ▶ OCLCのような分類専門検討セクションの設置可能性
 - ▶ 全国書誌作成機関(NDLやMARC作成業者等)との連携
- ▶ 新語・新概念の積極的な導入（語彙数の増加）
 - ▶ 随時新しい語が追加されるNDLSHとの連携
 - ▶ オンラインによる新語追加(10版ユーザーに対して?)

来るべきNDC11版に向けて（私見）

- ▶ マニュアルの必要性(10版刊行後ただちにでも)
 - ▶ DDCは本体(分冊)にManualを備えている
 - ▶ 似たような語や役割の番号に関する使用の指針
 - ▶ 「Use *** for ...」 ***は...のために使用しなさい。
 - ▶ 「If in doubt, prefer *****」迷った場合は、*****を優先しなさい。
 - ▶ 「See also discussion at *** vs. ++++」 *** と ++++ の解説を見よ。

006.3 vs. 153

Cognitive science

Cognitive science is the interdisciplinary study of the mind and computers as information processing systems.

Use 006.3 for cognitive science if the goal is to produce computer systems with better artificial intelligence. Use 153 for cognitive science if the goal is to understand better how the human mind works. If in doubt, prefer 006.3.

- ▶ NDCにも同様のものが必要ではないか(たとえ別売りでも)



図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

来るべきNDC11版に向けて（私見）

- ▶ 分類法の「版が改まる」ということは書誌的な意味でなく、記号法上で階層の追加や変更が行われることである。
- ▶ 新しい語を追加したり、古い語を訂正したりする程度の変更は「分類法の改訂」に含まれるものではないと思う。
(今回公開された改訂試案の中にも多数含まれている)
- ▶ NDC10版で採用した名辞も、11版の改訂を待たず時流に合わせて適宜追加・変更すべきと考える。
- ▶ 新しい語の位置づけを10版のユーザーに対して随時提供することで、10版を延命できる
(11版の改訂が次の15年後でも、ある程度の使用に耐えうる?)

おわりに -- いまわたしたちにできること

図書館に分類は不可欠の要素である

- ▶ 桁数の長い分類記号はジャマ？
 - ▶ ラベルは単に配架のための記号
 - ▶ 分類記号 ≠ 請求記号 = ラベル
 - ▶ 内容を正確に表す「書誌分類」へ
- ▶ 自動書庫に分類は不要？
 - ▶ 請求記号の付与やラベルの貼付は確かに不要
 - ▶ 利用者の求めるものを適切に提供するために
分類記号の重出や件名の付与はむしろ重要
- ▶ ...ということは、今後も分類作業は大事！



平成21年8月25日

平成21年度第1回大学図書館研究会アンケート

本日の研究会について感想をお聞かせください。

1. 実施内容について

2. その他、お気づきになった点について

3. 今後とりあげてほしいテーマについて

ありがとうございました。